

山田みやこの活動報告

令和7年8月5, 6日（火, 水）会派視察

JAたじま

「環境創造型農業とコウノトリ育むお米について」

西谷常務理事、営農生産部長、課長より話を伺う

但馬地域における環境に配慮した農業の取り組み

S63年コープこうべからの依頼により特別栽培米「つちかおり米」の栽培を開始し、JAたじまにおける環境に配慮した「環境創造型農業」の先駆けとなった。今では、10を超える特別栽培米を作付け。環境への負荷軽減と安全安心な農産物の生産につながる農業生物多様性を新たに生み出していく農業への取り組み。

コウノトリはS47年まで生息していたが農業・化学肥料を使っていた為、1971年野生のコウノトリ絶滅の危機。経済発展に伴い農薬を大量使用する農業の拡大。

そこで生産者3名が70aで無農薬栽培米に挑戦。20年経過し、コウノトリが野生復帰した。

肉食のコウノトリは1日500gのどじょう・ふな・バックなどの餌を食べるため、餌となるものが生息する生物多様性を新たに生み出した。

行政、JA、農家が心を一つにして収量は少ないが「特別栽培米」のコウノトリ育むお米（無農薬）と7.5割減農薬米を生産。負荷価値米として1.5倍の価格で販売、特別栽培米は全体の生産量の2割になる。

コウノトリ育む農法の定義

安全なお米と生き物を同時に育む農法

必須事項

- ①中干し前にオタマジャクシがトノサマガエルに変態
- ②化学農薬削減。無農薬米には不使用。減農薬米は7.5割減。
- ③化学肥料は不使用
- ④冬水田んぼ
- ⑤早期湛水（田植えの1ヶ月前に）
- ⑥深水管理
- ⑦中干し延期
- ⑧牛糞・堆肥・鶏糞堆肥等有機質資材を使用する場合は地元産とし、土壌の状態により使用量を加減。
- ⑨認証の取得（有機JAS、ひょうご安心ブランド）

一般の米よりコウノトリを育むお米は水田に水がある期間が圧倒的に多い（慣行栽培）

「数えきれないほどの生き物の命」が宿っていて、「小さな命さえも大切にする生産者がつくるお米」であるコウノトリ育むお米の生産拡大のため、

- ①生産部会の育成（生産者）
- ②JAたじま 無農薬栽培・指導面の強化⇒専門性高く
- ③豊岡市・兵庫県（行政）

の3者が三位一体の普及と消費者との交流に努力

山田みやこの活動報告

コウノトリ育むお米の現状

2005年	豊岡市でコウノトリ放鳥（5羽）
2006年	生産部会設立
2024.8月現在	部会員約250名 500haに拡大 1,600 t 生産 販売状況は、生協・スーパー・米穀店・ネット販売で JAS規格135 t、無農薬290 t、減農薬800 t 全国・海外にも拡大
2016年	豊岡市の学校給食すべてコウノトリ育むお米（減農薬）になった
現在	減農薬⇒無農薬へ

※持続可能な農業・産地を目指して

除草作業の受委託を行うことで、（JAが除薬機（600万）を購入）導入コストの削減。作業労力の軽減。安心して無農薬に取り組める体制を構築。

2024年10月にはJAグループ茨城においても、ネオニコチノイド農薬を非ネオニコチノイドに切り替える方針を決めたと報道。同様に田んぼにはコウノトリが飛来したということ。

栃木県も、持続可能な生物多様性、人にも健康にも安心な無農薬農法を推進すべきである。